

3 . 研究会 100 回記念によせて.....100 会記念誌より



100 回記念誌

【祝 100 回～支援者の皆さまから】

片マヒ自立研究会 100 回記念によせて	大田 仁史 (茨城県立健康プラザ管理者)	13
片マヒ自立研究会の皆様との「出会い」	細田 満和子 (NY市・コロンビア大学研究員)	14
生き甲斐と豊かさに乾杯	長原 慶子 (川崎市 元保健所課長)	15

祝 100 回
片マヒ自立研究会100回記念によせて

大田 仁史
(茨城県立健康プラザ管理者)

ピアサポートという言葉があります。同じ疾病や障害を負った人がお互い心理的に支え合うことを意味しています。私は脳卒中のような重度の障害を負った人たちが生活を立て直していくためにはこの支援システムが欠かせないと信じてきました。しかし、医療や保健の枠組みの中ではこのシステムを造ることは難しくなってきました。

それはそれとして、超高齢社会で、特に介護問題を考えるとき、この考えを敷衍したいと考えています。2015年には団塊の世代(昭和22、23、24年生)がすべて65歳を越えることになり、超高齢社会の始まりとして制度等がころころ変わっているのはご存じの通りです。その高齢社会到来の説明に、とっくり型の日本の人口ピラミッド図が使われています。たしかに第二団塊の世代に少しふくらみがあるだけで、座りの悪いとっくりの型です。ピラミッド図というのはピラミッドの形をしているからいうのであって、およそピラミッド図とはいえません。しかし、ここでよくこの妙な形のピラミッド図を見ていると気づくことがあるのです。

団塊の世代とその後2、3年の世代から上を切り離して眺めてみると、昭和21年までの数年を除けば見事にピラミッド形になっています。底辺が広い正三角形です。ここに超高齢社会を乗り切る鍵があるように思います。要するにこのピラミッド図の世代と以下の若い世代を切り離して考えるのです。

このピラミッド図の世代もおおよそ40年経てばこの世からいなくなります。そして次の世代はおそらく鉛筆を立てたような人口「ピラミッド」図を描くに違いありません。

それはそれなりにバランスが取れていて少人数を少人数で支えるということで、労働年数も長くなっていると考えられますからそれ程大変ではないでしょう。

切り離された団塊世代以上、特に団塊世代は自分より高齢の人を支えるのはもちろんですが、それだけでなく同世代が助け合う共助の精神が大切です。自助、共助です。したがって人数の少ない若い世代から受ける支援はできるだけ少なくしなければなりません。これは労働量においても経済においても言えることです。

まず団塊及びその後方近辺世代のピアサポートシステムができることが基本です。超高齢社会を乗り切る成否を握っていると言えるかもしれません。この世代は老後のことについて、己のみの楽しみを追求しているのは地獄に落ちることは目に見えています。なすべきことは、老後のあらゆること、特に介護ならびにその周辺のことを学び、力をつけ、自らが資源になる、すなわち人のために役立つことを考える必要があるということになります。

このような考え、またそのノウハウは実は片マヒ自立研究会が10年かけて蓄積してきたことではないでしょうか。片マヒ自立研究会の足跡を吟味し研究することによって超高齢社会を乗り切る手法を見出せるように私には思えます。そのような社会的な大きな意味を持ってきた、また持っている会が、片マヒといった障害者の問題に留まらず、私が述べたような視点で研究を重ね、情報を発信していただけることを信じて止みません。

戻る